2013年6月号・季刊40号

ミンダナオの風

執筆編集＊松居友／松居陽 / 大野民希

わたしの右足、何でこんなかって？
ピストルで撃たれたの
家族で、家にいたら
男たちが入ってきて、言った。
「おまえたち、5000ペソやるから
ここから黙って出ていけ。
出ていかないなら、命はないぞ！」
父さんは言った。
「ここは、先住民族の保護地だ。
おまえたちこそ、なぜここを奪う」
「親分が言ったんだ。
外国人のためのリゾートを開発する。
先住民族に金をやって追い出せと
おまえたちの一部も、
喜んで出ていったよ。」
父さんは、マノボ族の酋長だったし、
誇りもあったから言った。
「わたしは、出ていかない。
ここは先祖伝来の保護地だ！」
そう答えたとたん
パン、パン　パパン
拳銃の音が響いて父さんが倒れた。
母さんが、駆けよると
母さんも、おなかを撃たれて倒れた
わたしが、思わず、
駆けよろうとすると
とつぜん、足を撃たれたの。
父さんは、死んだわ。
わたし、今は、MCLの奨学生

１０周年の節目に、ミンダナオ子ども図書館の生い立ちを、考えてみたいと思います。

ミンダナオ子ども図書館が、１０周年を迎えたことを、前回書きました。

なぜミンダナオ子ども図書館を始めたのですか？

なぜ図書館なのに、医療やスカラシップ、はたまた保育所建設や植林、戦闘や洪水で出た避難民を救済したりするのですか？

などなど、様々な疑問が寄せられます。

そこで、今回は、ミンダナオ子ども図書館を始めた経緯。

なぜミンダナオ子ども図書館を始めたか。その理念は、どのようなものなのか。どのような困難や失敗があったのか。

そして、ミンダナオという場所は、どのような場所なのかなどなど、テーマ自体が、文化や平和、先住民族やイスラム教徒などなど、非常に多岐にわたるだけに、連載という形で書き始めることにしました。

正直に言って、日本にいたときには、そしてまた、現地で戦争避難民を見ることがなければ、ミンダナオ子ども図書館など、作ろうと考えることは無かったに違いない。

なぜミンダナオ子ども図書館を始めたか　（連載１）

松居友

ミンダナオ子ども図書館は。出発の時点からすでに、読み語りと文化活動を基幹にすえ、二次目的として医療プロジェクトとスカラシップの認可を、そして避難民救済活動と収容キャンプとして本部を解放する許可を、２００３年にフィリピン政府に登録し、正式な許可を受けている。

その後、現地からの願いや状況から判断して、保育所支援と植林活動が加わるのだが、出発当時さまざまな想いをめぐらせたあげく、ぼくの心に浮かんできたイメージは一本の大木だった。

大木の根幹は、読み語り（文化プロジェクト）で、そこから医療、スカラシップ、避難民救済といった枝が派生する。現在は、枝の一つに、保育所支援と植林支援が加わっている。

大木を支えている大地の役割を現地スタッフが持ち、無数の枝先の葉や花は、育っていく子どもたち。子どもたちはやがて実を結び、風に吹かれて木を離れ、独立して新たな木となって森を作っていく。

日本から、海外から、自由寄付やスカラシップで支援してくださっている多くの方々は、天から降り注ぎ子どもたちを見守り育ててくださる、愛の日ざしだ！

ミンダナオ子ども図書館の入り口には、大きな火炎樹（ファイアーツリー）が、葉を茂らせ、炎のような花をつけ、やがて実をならせていくことをくり返している。

図書館を始めたときは、ここは１・４ヘクタールのゴムの木の林で、それを切って最初の建物を建てた。そのときに火炎樹の苗も植えた。

植えたときは小さかったのに、ミンダナオのジャングルを育ててきた環境は、

あっというまにこの木を大木に育てていった。そして現在、数ヶ月おきに、炎が飛び散っているような壮観な花をつけ実を結ぶ。

この木をながめていると、いつも子どもたちのこと、それを支える自分たちの責任、そして空から日ざしとなって降り注いでくださる、支援者の方々のことを思う。

日ざしは愛だ。無償の愛だ。太陽という創造主から流れ出す無限の日ざしが、木漏れ日となって暗い森の中に差しこんで、芽生えたばかりの小さな苗や若木に優しく降り注ぐように、ミンダナオの親のいない極貧の子どもたちに降り注ぐ。

ぼくの心に浮かんだ、ミンダナオ子ども図書館のイメージと、その根幹的構造は、こうした大木のイメージで出来ていて、今も変それはわらない。

普通ファンデーションと言えば、医療、スカラシップ、避難民救済、植林などと専門分野が特化されているのが普通だが、それだけでは、ここの子どもたちを救済しきれない、と感じた。

まさに、過去学んだゲーテやユングやゼーデルマイヤーのような、部分と全体を総合した錬金術的な世界観が必要なのかもしれない。元来人類の宇宙、生成と生長のイメージは木であり、日本の神木、ミンダナオの民話に現れる、池の畔の巨

振り込み用紙の通信欄に「スカラシップ」または「里子」と書いて一部振り込んできただけれは、支援学生を紹介。機関誌に同封して、本人からのお礼の手紙（英語）、６月に成績表、８月に写真、１２月に絵手紙。
里子支援は、８月に写真。本人からは、１２月に本人が描いた絵手紙が届きます。
訪問の際は、自宅にご案内します。支援停止は、いつでも可能です。

大な木もこれである。この大樹には妖精たちも住み、神々が降り、死者が昇る。

「図書館なのに、なぜ医療をするのですか？」

「戦争や洪水があると、図書館なのになぜ難民救済活動に向かうのですか？」

などと日本でも怪訝な顔をして良く聞かれるし、またミンダナオ子ども図書館の現地名称は、Mindanao Children's Library Foundation, Incorporatied. (MCLFI) で、現地では略してＭＣＬで名が通っている。

その頭文字を並べたＭＣＬの意味が、ムスリム、クリスチャン、ルマッドの頭文字を採ったのだと思っている人も多い。

「えっ、ＭＣＬって、ミンダナオ子ども図書館の略称だったんですか。てっきり、ムスリム・クリスチャン・ルマッド・ファンデーションの略称だと思っていましたよ。」

ルマッドとは、現地語で先住民族の事を言う。ミンダナオ子ども図書館は、基本的にスカラシップを、先住民、イスラム教徒、クリスチャンに平等に出し、それぞれの地域で活動するようにしている。

そうした活動の中心になるのは子どもたちだ。

イスラム地域で勃発した戦争の避難民を救済するのも、子どもたち。クリスチャン、先住民、イスラム教徒の子どもたち。極貧の先住民族の村で、読み語りをするのも、子どもたち。こうした活動を通して、育ち盛りの子どもたち、若者たちは、他部族、他宗教、他地域の貧しい子どもたちの現状を見て理解していく。

先住民族には近隣のマノボ族、バゴボ族、ビラアン族がいて、プロテスタント教会に行っている子が多い。

イスラム教徒は、おもにマギンダナオ族とタウスグ族。同じイスラム教徒でも、種族は多様で言語は異なる。

興味深いのは、イスラム教徒でありながら、独自のシャマニスティックな霊的な信仰儀式があり、ミンダナオ子ども図書館のイスラムデーの文化祭でそれを奨学生たちが発表し、その様子をサイトに載せてしばらくして問い合わせがあり、ユネスコ文化保存協会が、現地に取材に行ったのには驚いた。

国立民族博物館の専門員に言わせると、先住民族の文化も稀少で、ミンダナオは、知る人ぞ知る、大変な文化の宝庫なのだ。

キリスト教徒のカトリックは、移民系クリスチャンと呼ばれて、ミンダナオ島の外から開拓に移住してきた人々が多い。来た地方としゃべる言語の違いから、ビサヤ、イロンゴ、イロカノなどと呼ばれている。

移民系だから豊かだろうというと、決してそうではない。山地で先住民たちと貧しく暮らしている場合も多く、プランテーションなどに追われて、先住民たちと共に、ゲリラ化していく人たちもいる。

彼らのカトリック文化も独特で、マリア様の御像の前に置かれているローソクの火から昇る煙を、手の平を差し出して受けて自分の肩に当てたりする。まるで日本のお寺や神社で、おせんこの煙を体に当てているのと全く同じ風景。信仰と言うより信心と行った方が良いような・・・

クリスマスなどは、何と9月から飾りつけが始まり、クリスマスの一週間前からは、ミサデガリオといって、夜明け前のミサに、大聖堂の外まで満杯の大勢の人々が参加する。御利益があるのだとか・・・。

復活祭には、やはり夜明け前のミサに、子どもたちが天使の格好をして参加して、マリアとイエスを教会に迎える劇をする。

日の出のミサが重要視されるのは、おそらく古代の太陽信仰と関係していて、日本で初日の出を仰ぐ習慣と共通してい

子どもの紹介は、ウエッブサイト　検索「ミンダナオ子ども図書館」の「スカラシップ・里子紹介サイトページ」にさらに多く、順次最新の情報を載せています。入るためのパスワードは、「mindanao」です。
サイトからそのままメールで現地スタッフと、支援する子どものご相談と確定が可能です。

る？

正月には、大晦日に長生きのために、蕎麦ならずスパゲッティーや焼きそばと言った麺類を食べるし・・・スペインやアメリカの影響は受けても、やはりアジアだなあとつくづく思う。

ヨーロッパやアメリカから来た厳格な牧師さんや神父さんのなかには、そうした行為を本質から逸脱している言って、否定する人もいるようだが、ぼくは、そんなファジーな信仰が居心地が良い。アジア的キリスト教が、ここでは生きて復活している？

ミンダナオ子ども図書館は、出発時に、こうした宗教や種族の違いを考慮して、あえて特定の宗派の下では行動しない、Non Religious sect そしてまた、政治の下では行動しない Non Politic な団体であることを打ちだした。

もちろん宗教や政治を否定しているわけでは決して無く、互いの宗教を尊敬し、理解し、認め合い、その上で愛と友情を培っていくことを謳っている。多様性を尊重するがために、特定の宗派や政治団体の下では、活動しないというわけだが、立正佼正会や真言宗、創価学会の若者も来たし、プロテスタントの牧師、カトリックの神父、教会とも関係を持ち合いながら、現地でも活動している。

日本政府のＯＤＡやＪＩＣＡとも、ＵＮＨＣＲとも、国際停戦監視団ＩＭＴとも、状況によって、協力し会って行動している。

奨学生たちとは、２ヶ月に一回ある総会の時に、文化祭をする。７月が先住民族の日、９月がクリスチャンの日、１月がイスラム教徒の日、そして５月には、シンポジウムを開催する。

敷地内には、イスラム教徒の寺院、モスクも建てたし。７月の最終日曜日に行われている先住民族の文化祭では、今年は、先住民族の伝統的な祈りの場を作り、みんなで開所式をする予定だ。

モスクを建てた理由は、本部のある村にはプロテスタントやカトリックの教会は多数あるのだが、モスクが無く。イスラム教徒たちが祈る場がないからで、それを寄付してくださったのは、なんと埼玉のカトリック教会の方々が、日本イスラミックセンターに声をかけ、協力して寄付をしてくださったのだ！

今年の７月には、先住民の祈りの場が作られる。

最後に敷地内に、クリスチャンの子たちが祈れる、野外礼拝所とルルド作りたいのだが、どなたか寄贈してくださいませんか？そうすれば、先住民の子も、イスラム教徒の子も、プロテスタントとカトリックの子も祈る場が得られるのですが・・・。

親が殺されたり、病気や自殺で亡くなったり。自分を置いていなくなったり、空腹とショックで完全に呆けて徘徊したり、他の相手と一緒になって取り残されたり。そのあげく保護者もなく、１，２年生で近所の人にレイプされていた子もいる。

なかには子を産んだ少女もいて、引き取って、一緒に家族として生活しながら、大学まで行かせてあげているが、それがミンダナオ子ども図書館の本部なのです。

２０１３年現在、スカラシップの合計は、小学校から大学まで６３０名あまりだが、そのなかでもとりわけ前述のような子どもたち、それに加えて、学校まで遠くて通えなかったり、極貧で３食たべられないような家庭の子たちは、ＭＣＬの本部に住むことができる。

ウエッブサイトに、活動報告と詳しい支援方法が書かれています。サイトからメールも可能です。
「検索：ミンダナオ子ども図書館」
http://home.att.ne.jp/grape/MindanaoCL/mindanews.htm

本部の子たちは、現在１２０名あまり。彼らが自分たちでスケジュールを組んで、朝４時半に起きて朝食の準備をし、掃除も庭造りも野菜作りも、皆彼らが行っている。

食事は、みんな一緒に食べる。イスラム教徒、マノボ族、プロテスタントやカトリック、それぞれ順番に個人の祈りを唱えた後で、みんなで相談した全体の祈りをし、その後、手を合わせたり、両手で顔から頬をなぜたり、十字を切ったり。

問題は、話し合いで解決をする。

「イスラム教徒がいるから、豚は食べるのをやめよう。」

「でも、クリスチャンデーの文化祭などでは、豚の丸焼きを作っても良いよ。机を別にすれば良いんだから。」

イスラム教徒の断食ラマダン時には、住んでいるイスラム教徒の奨学生たちも断食をする。でも、日が沈むと台所で楽しそうに歓談しながら食事。

ラマダンが開けてめでたい祝日。食卓にイスラム教徒の子たちが戻ってくると、キリスト教徒の子たちは手をふって声をかける。

「ハッピー　ラマダン！」

「ありがとう！」イスラム教徒たちは、笑顔で答える。

「イスラム教徒とキリスト教徒が一緒に一つ屋根で暮らすなんて、不可能だ！」という人にもちょくちょく会うが、ぜーんぜん問題はない。

それどころが、彼らはみんな、自分たちはファミリーで、ここにいる子たちは皆、自分たちの兄弟姉妹だと言い張る。

「ＭＣＬファミリーにようこそ！」

ミンダナオ子ども図書館は、図書館ではあるものの、まだ図書館らしい建物を持っていない。家庭文庫と言った感じか？

寮棟は、三棟あって、スカラシップを受けている小学生から高校大学生までが一緒に生活している。

フィリピンには、しっかりした概念に基づく子ども図書館というものが無いと言っても良いだろう。

唯一マニラには、日本とも関係が深い友人ニナ・ユソンさんが作られた子ども博物館（ムゼオ・パンバタ）があり、必見の価値があるが、独立した子ども図書館というものはない。

そのようなわけで、日本の子ども図書館の権威、北九州在住の平湯文夫さんや東京子ども図書館と相談して、ＪＩＣＡなどの協力を得て、小さくてもモデルになるような図書館を敷地内に作ることを真剣に考えたこともあった。

しかし、現地の貧困状況が図書館どころの騒ぎではなく、町の郊外にある本部の敷地内に建物を作っても、山の極貧層の子どもたちが、ここまで来られるわけがない。

裸足で三食たべられず、山芋を採って食いつなぎ、良くて沢で採ったカエルを食べる・・・そんな事情を目の当たりにすると、図書館を建てても、町に近い小金持ちの家の子たちが喜ぶだけで自己満足にすぎず、その前に、やるべき事が山積していることがわかってきた。

それに、フィリピンのオリジナルの絵本はタガログ語がせいぜいで、後は海外から持ってきた英語の絵本。

ところが、現地で使われている母語は、ビサヤ語、イロンゴ語のほか、先住民族やイスラム教徒のマノボ語、バゴボ語、ビラーン語、マギンダナオ語、タウスグ語など。そうした言葉は、絵本どころか本もなく、読み聞かせなど考えられない。

本来、子どもに愛を伝えるための手段としての読み聞かせは、父母や祖父母が母語で語りかけ読み聞かせるのが原則で、他語を使って読み聞かせると、どうしてもよそよそしくなりはしまいか。

そうとも限らないかもしれないとしても、現地で読み聞かせをするに連れて、地元の言葉や文化を無視した絵本の語りは、豊かな国の文化を、貧しい国に押しつけているようで、文化軽視、文化破壊に見えてきた。

絵本は、豊かな国だから作れるのであって、バゴボ族やマギンダナオ族が自分の言語で絵本を作り出すような、経済的力はない。

ならばミンダナオ子ども図書館で、マノボ族やイスラム教徒のところに、英語やタガログ語、時には日本語の絵本を持っていって、どのように読み聞かせているのかと、疑問に思う人もいるに違いない。

答えを言うと、奨学生の若者たちが、現地の集落の子どもたちの前に立って、タガログ語や英語の絵本を持ち、マノボ

子どもの紹介は、ウエッブサイト　検索『ミンダナオ子ども図書館」の「スカラシップ・里子紹介サイトページ」にさらに多く、順次最新の情報を載せています。入るためのパスワードは、「mindanao」です。サイトからそのままメールで現地スタッフと、支援する子どものご相談と確定が可能です。

地域ではマノボ語を優先し、イスラムの地域では現地のマギンダナオ語を優先して、「読む」のではなく、「語る」のだ。

現地語が使えない子は、ビサヤやタガログ語で語り、それを現地出身の奨学生が通訳しながら子どもに語る。

それゆえに、「読み聞かせ」という言葉は似合わず、「読み語り」という言葉を使う。

現地の昔語りも、子どもたちはする。

どうやって、絵本の内容やストーリィーを覚えるのかって？

ミンダナオの子どもたちは、生まれつき語りが上手でなれていて、たとえば日本語の絵本でも、ぼくが一度読んであげると、ストーリィーをたちまち記憶し、独自の展開を加えながら、絵本を見せながらおもしろ楽しく物語る。

このことは、後ほど書きたいが、ミンダナオには絵本がほとんど無いものの、ミンダナオは、語りの生きている世界なのだ。日本やアメリカやヨーロッパよりもはるかに深く、子どもたち、大人たち、

老人たちの心の底に。

現地では、図書館づくりより、まず大切なのは、読み語り運動で、たとえ図書館は無くとも、こうした運動はどんなところでも容易に展開出来る。

図書館建設の夢は、くり返される戦争の勃発と避難民救済活動によっても延期されざるをえなかった。

北コタバト州に足を踏み入れた2000年から（ミンダナオに足を踏み入れたのは、1998年。NGO認定を受けたのが2003年）それ以来、翌年の2001年には、米国の爆弾テロ911事件を受けて、イスラム教徒のいるミンダナオで、フィリピンとアメリカ軍の合同演習（バリカタン）が展開された。

ぼくが初めてバリエス司教に連れられて、ピキットに行き、大量の避難民を見たのはこのときだ。

こうしたことに、ことのほか無知なぼくには、難民キャンプと言うからには、テントが設営されていて、そこに避難しているのかと思いきや、テントどころかビニールシートもほとんど無く、ひどい場合は、枝に椰子の葉を置いたような屋根の下で、地面にも椰子の葉を広げただけで、その上で大勢の子どもや母親が窮乏生活を送っている。

なんだこれは？と唖然とするばかりで、声も出ない。

しかも、子どもたちは大勢いるにもかかわらず表情も無い。

フィリピンに行かれた方ならわかると思うのだけれども、現地の特にテレビも無い田舎の子どもたちは、本当に表情が豊かで（ミンダナオ子ども図書館の子どもたちを見れば解ると思うのだけれど）心が開かれていて開放的で、外国人に対しても、言葉が解らなくても心を閉ざすことなく話しかけ、手を振ると笑顔で手をふりかえして駆け寄ってくる。

実は、戦闘地を見る前は、そんな半分野生であるかのような自然な子どもたちに出会い、心を救われただけに（そのことは、女子パウロ会出版の『サンパギータの白い花』に書いた）、1年半以上も避難民化したあげく、表情を失った子どもたちの様子を見て、心の大地がひび割れるような辛い痛みを感じた。

そのとき天から落ちてくるように感じたのは、「この子たちを集めて、絵本の読み語りをしてあげたい」という気持ちだった。

読み語りの心理作用については、すでに日本でも数多くの講演会で語り続けてきたし、自分も父母から読み聞かせをしてもらって育っていたので（父は福音館書店の松居直で、自分の執筆した「だいくとおにろく」や編集した絵本を、子ども時代に読んでくれた。）そうした体験もあり、戦争のトラウマから抜け出すためにも、読み語りをしてあげたいと強く想った。

ぼく自身、現地語での読み語りはまだ出来なかったのだが、すでに2年前ほどから、ミンダナオの東の半島近くにある、孤児施設ハウスオブジョイに滞在し、そこの子どもたちと一緒に、読み語りを海辺の村などで実験的に行っていたので、活動自体はすぐにでも始められる。

幸い、ハウスオブジョイの隣の市長さん宅で働きながら学校に行かせてもらっ

ていた、二人の女子高生が、北海道出身の神父と一緒に、キダパワンの司教館に移り、彼女らとはすでにいっしょに読み語りを行っていて、そこにぼくも同行したので、読み語りを開始するのは可能だった。その一人は、今の妻、エープリルリン。

もう一つ、ぼくが心を痛めたのは、避難民キャンプの大勢の子どもたちのなかに、病気の子どもがいることだった。

そこで、同行して案内してくださっている方に、「この子を、ポケットマネーで病院に連れて行ってあげたいのです

が」というと、ぼくの気持ちを察するがゆえに、言い出しにくそうに、「ここでは、正式に登録されたNGO関係者以外の活動は、許されていないのです」と、答えられた。

そんな馬鹿なこと、あるだろうか？目の前に病気になって倒れている子どもを、救うことが許されないなどとは・・・。

その方は、教会関係の方だったので、「イエスは、病気の人たちを救った。助けを求めている人に手をさしのべた。彼は、どこのNGOに属して活動していたのですか？」と言うと。

「全くその通りです。でも、あなたが、その子を病院に連れて行った行為が、誘拐や人身売買のように疑われても仕方がない・・・」

ぼくは、二の句が継げなかった。

その後、知ったことだが、こうした地域での活動は、許可がなければ、読み語りでさえ禁止されていたのだった。

その方は、その後、ポツリと言った。

「あなたは、この町の食堂のナマズ料理を食べられますか？」

「ええ、魚料理は大好きですよ。」と答えると、「人の味がするのです・・・」。

「エエッ！」と顔を引きつらせたぼくを見て、その方は、話を続けた。

「ここには、大きなプランギ川とリグアサン湿原がある。そこから、魚がたくさん捕れるのですが、フィリピン海軍が戦闘用のボートでコタバト市からここまで一斉射撃をしながら登ってきて、あそこの今ランディングピースと呼ばれるところに上陸し、空爆と一斉射撃をしながら、イスラム勢力を掃討した。

そのとき、多くの人々が死んだ。

反政府軍も死んだでしょうが、それ以上に一般の住民が巻き添えになった。彼らは、親や子どもたちの死体を埋める暇なく、死体を川に流して逃げたのです。

だから、ここで捕れる魚は、死人を食べて大きくなった。それで、人の味がすると言われているのです。」

返す言葉が全くなかった。

頭の中で、思考は停止していた。

NGOにも国際支援にも全く興味が無く、日本にいたときには、子どもの引きこもりや不登校に関心を持ってはいても、ボランティア活動などは偽善的でいかがわしいと感じ、青年海外協力隊の名前は知っていても参加しようなどとは一

度も思ったことのないぼくが、なぜ現地ではNGOと呼ばれている（どう呼ばれようと勝手だが）ミンダナオ子ども図書館を作り、極貧のしかも両親や片親や崩壊家庭の子どもたちに、読み語りの機会を与え、とうてい彼らには考えられない、たとえ考えたとしても実現しようも無いような、大学までの進学の機会を与え、病院での手術も可能にするような、現在の活動組織を作るに至ったのかは、自分でも謎だ。

しかし、ミンダナオ子ども図書館をなぜ始めたかを考えるときに、必ず浮かぶ二つの体験がある。

そのもう一つは、次回にでも語ることにして、そのなかの一つは明らかに、ピキットで大量のイスラム教徒の戦争避難民、とりわけ精神的にも肉体的にも衰弱しきっている子どもたちを見たからだ。

（続く）

午後、野菜を売りにいく　松居陽

最近、野菜売りの子どもたちをカメラで追っている。朝、米が買えないので、青いバナナをゆでて食べる。ドールのバナナ農園を抜けて、灌漑で出来た沼地に生えている山菜を摘み取る。

突如、豪雨。初めは遊んでいたものの、だんだん惨めな空気に。増水する川を渡り、とぼとぼ家へ。着いても乾いた服がなく、裸で震える。

午後、野菜を売りに行く。野菜いっぱいのたらいを頭に乗せて、豪邸が立ち並ぶ住宅地を叫び歩く。

街についたころには日も沈み、電灯の下にしゃがみこむ。野菜は、半分くらいしか売れなかった。収入は、約４００円。帰るころには疲れきっていて、出る言葉もない。

カメラを守りつつ、その瞬間を映像に収めることに精一杯でいながらも、僕たちは、一つの経験を分かち合っている。

普通なら避けるであろう状況に飛び込んでみると、自分の意外なキャパシティに気づく。

恐れ。苦しみ。そこには、不思議な魔法がある。顔を背けさせない、何か。

それは、真正面から僕を見つめて、目をそらさない。その視線は、あまりにも重く、あまりにもリアルで、逃げようとする者の精神を崩壊する力を持っている。無駄なあがきのあと、どうしようもなく、苦しみに身をゆだねる。そこに、愛を見る。

教訓は、僕は苦しみに見舞われている、苦しみの対象となっている存在ではない、ということ。起こっている苦しみそのものが、自分である、ということ。境目がないことに気づけば、苦しみの体験も、愛の体験になる。

それは、決して気持ちのいいものじゃない。恐れは恐れのままだし、苦しみは、苦しみのままだ。いつもより強く感じることだってある。でも、それを感じている僕がいなければ、感じているものが、僕自身であれば、感じていることから自分を守ろうという衝動は、いらなくなる。ありのままに感じることが出来るようになる。

そうすると、感じていることだけじゃなく、見えているものさえ、自分自身だと言えるかもしれない。どんなに美しい笑顔も、どんなに惨めな泣きっ面も、起こっているがゆえに自分自身であるとしたら？イマジン。全てに無防備になりつつ、全てに守られている、不思議な感覚。

全てが自分自身だ、と言い切ることは、自分などいない、と言うことと変わらない。なぜって、自分を「世界」と相対的に存在する「何か」とすると、世界を自分に含んでしまった場合、自分と世界との相対関係がなくなってしまうからだ。

「何か」は他の何かとの相対によって生まれるわけで、全てをひっくるめてしまうと、特定の何はなくなり、何でもなくなってしまう。自分しかいなければ、自分などいない。問い詰めてみれば、何もが矛盾に解決する。

言葉に出来ないものを、言葉にしようとするのは、人の永遠のロマンだ。絶対的な存在として、神という言葉があるが、それは、神が人から離れて、または悪魔から離れて存在すると仮定した時点で、相対的な存在になってしまっている。

愛という言葉は、身近に感じられるので、好きだ。全てを包み込む、全ての本質である存在のようにも感じられる。でも愛だって、憎しみや恐れの対照としてみられる傾向がある。

言葉にしてしまうと、必然的に対義語を作る欲が生まれる。なぜって、反するものなしに、その言葉を理解することは出来ないからだ。でも、全てであって、何でもないものは、理解できないというところ、ポイントがないという所が、ポイントだ。言葉の全てであるからこそ、言葉では決してとらえられない。

自分と世界の一体性を考えさせられ始めたのも、こんなに違った現実の中、こんなに違った文化を持ち、こんなに違った生活を送る子どもたちに会えたからかもしれない。

特に、単一文化国の若者たちには、ぜひ世界を渡り歩いてもらいたい。自分がいかに育ち得たアイデンティティーを超えた存在か、いかに世界と自分との間に境目がないかを、気づかされることだろう。

ウエッブサイトに、活動報告と詳しい支援方法が書かれています。サイトからメールも可能です。
「検索：ミンダナオ子ども図書館」
http://home.att.ne.jp/grape/MindanaoCL/mindanews.htm

支援者の見つかっていない子どもたち

Jocelyn B. Pableo

高校1年・セブアノ
イスラム地域のカトリック
5人兄弟。成績は良い

Reneboy Gabao

高校一年・マノボ族・クリスチャン
両親は離別、母親だけでは貧しく
学校に行かせられない

Ali Gayansong

小学一年・マギンダナオ族
イスラム教徒　母は死亡
父親は別の女性と一緒で遠くにいる

Saiima Mulilis

高校一年・イスラム教徒・14歳
常に戦闘にさらされ、難民になってきた
看護士になって人を助けたい

Genevieve L. Elando

小学5年・マノボ族　15歳
両親はいるが土地はなく
8人兄弟で生活困窮

Ariel B. Pableo

小学一年・マギンダナオ族
イスラム教徒、生活は貧しく
戦闘が絶えない地域

Cust Jade Montecalbo

大学一年・ビサヤ族
父は死亡、母は不明、生まれつき足に障害
苦労して高校を卒業

Charlita Eli

大学一年・タガバワ族
両親は山に住み極貧、苦労して高校卒業
成績は良い

Japhet Merced

大学一年・タガバワ族
父も母も死亡・3人の兄弟はバラバラ
成績は良い

スカラシップ・里子支援の方法

郵便振替用紙に、「スカラシップ」または「里子」と書いて、支援額の一部を振り込んでいただければ、後日、現地から手紙やメールで支援の子を紹介させていただきます。学年、男女、境遇、年齢、イスラム教徒、キリスト教徒、先住民族など希望があればお書きください。出来るだけご希望に添う子を、紹介させていただきます。

紹介欄に載っている特定の「この子を支援したい」場合は、振替用紙の通信欄に子どもの名前を書いてお送りください。子どもの紹介は、ウエッブサイトの「スカラシップ・里子紹介サイトページ」にも順次、最新の情報を乗せていきます。入るのにパスワードが必要です。パスワードは、「mindanao」です。

奨学生の決定は先着順とさせていただきますので、サイトから「支援申し込み」をクリックして記入し、通信欄に希望の子の名前を書いてウエッブメールしていただくかのが一番早いと思います。折り返しスタッフから返事を送ります。すでに支援者が決まった子の場合は、ご相談させていただきます。

ウエッブサイトに、活動報告と詳しい支援方法が書かれています。サイトからメールも可能です。
「検索：ミンダナオ子ども図書館」
http://home.att.ne.jp/grape/MindanaoCL/mindanews.htm

山菜売りの少女　4

前号からの続き

ギンギンたちが、大岩から遠ざかっていくとき、大岩の上から、ギンギンたちが去っていく後ろ姿を、しずかに見まもっている影があった。

緑色の帽子を頭にのせて、それぞれ青と赤と黄色の服をまとった三人の妖精たち。

さらにその後ろには、他の妖精たちもいる。その中の一人は、飛びぬけて背が高く、かっぷくの良い男の妖精。

マノボの酋長が着るような、刺繍の入った紺色の衣装と、これまた刺繍の入った茶色のズボンに身を固め、頭に茶色の頭巾をかぶっている。

そのわきを取り巻いているのは、色とりどりの服を着た、七人の妖精の男の子たち。

妖精の男の子たちのなかで、いちばん大柄な少年が、去っていくギンギン、クリスティン、ジョイジョイの方をじっと見つめながらつぶやいた。

「あの子たちが、何の罪もないのに土地を追われて、父さんが殺されたっていう、マノボ族の子たちなんだね。」

マノボの酋長らしき妖精が、去っていく子どもたちの後ろ姿を、いつまでもじっと見つめながらいった。

「そうだよ。彼らの母さんのことも、ばあちゃんのことも、わたしはよく知っている。もちろん、子どもたちのこともね。」

町で

マノンゴル村でも、山菜は売れず、ギンギンたちは、コンクリートの道を町に向かって歩きはじめた。

両脇には、コンクリートの高い壁でおおわれた、お金持ちの家々が建っている。ガレージがあって、自動車がおいてある家もある。

そのとき、緑色の軍用車が5台つらなってやってきて、山菜売りの少女たちのすぐ横を、ものすごい勢いで走りぬけた。

後ろの座席には、鉄砲を手に持った兵隊たちがたくさんのっている。

「山でまた、戦争が起こっているのね。」

クリスティンがそういったとたん、つづいて2台のオートバイが、緑の服を着

た3人の兵隊を乗せて、エンジンの音をたてながらトラックの後をおいかけていった。

「姉ちゃんのいる、山かなあ」ジョイジョイがつぶやいた。

「こわいね」ギンギンがいった。

コンクリートの坂道を下っていくと、やがて三人は国道に出た。

パン屋さんの角を左にまがると、子どもたちは、キダパワンの町中に向かって歩きはじめた。

大きな教会の前をとおり、町の中心に近づくにつれて、自動車、トラック、バスやジプニーが多くなり、それらに混じって、たくさんのトライシクルやバイクがぬうように走っていく。

運転手も乗っている人たちも、行く先をじっと見つめたまま、山菜売りの子どもたちがいることなど気づかない。

たとえ気がついても、激しく警笛をならすだけで、止まって山菜を買ってくれるわけではないし・・・。

お店で買い物をしている人たち以外は、歩いている人はほとんどいない。

町中に向かって歩いているのは、山菜売りのわたしたちと、お金がない浮浪者とストリートチルドレンぐらいで、みな、トライシクルにのって移動している。

元気なはずの、若者や子どもたちまで、自転車つきのトライシクルにのったりしている。

山だと、歩いている人がほどんどなんだけれど・・・。

「お金がなくちゃ、町には住めないね。」

クリスティンがいった。

「わたしたち、ここに住んだら、浮浪者かストリートチルドレンになるしかないな。」

ギンギンがつぶやいた。

町に近づくにしたがって、お店の数が増えはじめた。

オートバイの修理屋、ペンキ屋、金物屋、看板屋、家具屋、そして町の中心に近づくにしたがって、文房具屋、日用雑貨屋、中古のテレビ屋。

町の中心部には大きな市場があり、そのあたりまで来ると、人通りも多くにぎやかになりはじめた。

買い物をしている人たちが増えてくる。
さまざまな食堂、パン屋、お菓子屋、床屋、古着屋、電器屋、薬屋などなど、ありとあらゆる店がならんでいる。
「カンコン、タクワイ、パコパコ。」
「カンコン、タクワイ、パコパコ。」
「山菜買ってくださいなあーーー。」
ギンギンたちは、薬屋さんの前まで来ると、売り場にいるお姉さんたちに声をかけた。
みんなちょっとビックリしたようだったが、一人のお姉さんが、貧しい格好の少女たちをみて、ほほ笑んでいった。
「何のお野菜、持ってきたの。」
「カンコン、タクワイ、パコパコ。」
薬がならんでいるガラスのショーケースの上に、ギンギンたちは、山菜のはいったタライをおいた。

ほかのお姉さんたちも、よってきていった。
「キャベツとか、ニンジンはないの？」
「あれまあ、山菜だけなのね。」
「・・・・・・・」
黙ってしまった子どもたちを見て、最初に声をかけてくれたお姉さんがいった。
「わたし、買うわ。タクワイとパコパコにしようかな。」
長い髪の毛をリボンで後ろ手にむすんだお姉さんが、タライのなかから、タクワイを二袋とパコパコの束を二つとりだしてたずねた。
「おいくら？」
「タクワイ一袋１０ペソ、パコパコ一束５ペソだから、全部で３０ペソ。」
クリスティンがこたえると、お姉さんは、ポケットからおさいふをだして、なかから３０ペソとりだすと、ジョイジョイにわたした。
それをみて、他の売り子のお姉さんたちも、
「わたしも、買おうかしら」といって、少しずつだけれど、山菜を買ってくれた。
ギンギンもクリスティンもジョイジョイも、おおよろこびで、ふたたびタライを頭にのせると、薬屋を後にして市場の方にむかって歩きだした。
きゅうに、人通りが増えてきた。
道ぞいの空いている場所には、鳥の串焼きや丸焼きを焼いている屋台。バナナやマンゴーなどの果物を並べている売り台。
ギンギンたちは、木の台の上で、シンカマス（砂糖大根）を売っているおばさんたちがいる角をまがって、市場に入っていった。

市場で

市場の中は、ものすごい人混み。
果物屋のまえには、バナナ、マンゴー、パイナップル、マンゴスティン、ランソネス、ランブータンといった、熱帯果実が、ところせましとならんでいる。
トゲトゲのドリアンもある。
ギンギンたちは、果物屋の前の石段をのぼると、市場の大きな建物のなかに入っていった。裸電球のしたで、たくさんの魚屋さんが、所せましと軒をならべて商売をしている。
魚売りの女たちが、さけんでいる。
「いらっしゃい、いらっしゃい。
マグロもテラピアもバゴスもあるよ。
安くしとくよーーっ。」
「とりたてのイカだよ。アジはどうだい。」
「ナマズだよナマズ！
新鮮だよ、生きているよ！」
売り台のまえを、ショウガやニンニクや小粒のトマトをいれたザルを持った子どもたちが歩き回って、買い物客にすりよると、下から話しかけている。
「ねえ、これ買って。」
「お願いだから。」
子どもたちも、こうして小さな野菜を売りながら、母さんたちのお手伝いをしているのだ。
ギンギンたちが、山菜の入ったタライをさしだすと、哀れに思ったのか、数人の人たちが買ってくれた。でも、ほとんどの人たちは、自分たちのお店のものを売りさばいたり、必要な買い物をするのに忙しくて、ボロボロの服をまとって、山菜の入ったタライを頭にのせた少女たちのほうを見向きもしない。
裸電球と飛び交う人々の声。
すごい活気にもかかわらず、売れない山菜を頭にかついで歩いているギンギンたちは、なんだかさびしい気持ちになってきた。
「はやく山にかえりたいなあ」ジョイジョイがいった。
「でも、山菜うれないと、母さん、がっかりするよ」クリスティンがこたえた。

（続く）

ミンダナオ子ども図書館・支援方法
Mindanao Children's Library Foundation, Inc.

貧しいからといって、必ずしも不幸とは限らない
私たちの生活の方が、豊かな国の人々の生活よりも
はるかに美しいと感じるときだってある。
けれども、どうにもならないのが、
一日３食たべられないときと、
お金がなくて、学校に行けないとき
病気になってもお医者さんに行けないとき・・・

1．医療や読み語り活動を、支援してくださる方々へ・・・自由寄付

自由寄付は、戦争難民救済や医療、広範囲に広がる村々とのコミュニケーション。支援者に紹介する以前の成績が不安定な極貧の子たちの学費。片親や孤児、障害を持った子などが１２０名あまりが暮らす本部、および学校に遠くて通えない子どもたちの山の下宿小屋、大学生たちの町の下宿施設の運営費や食事代など・・・活動費の根幹を支える寄付です。
機関誌の購読料のつもりで、少額でも結構です！よろしくお願いします。
機関誌は、４月、６月、８月、１０月に加え１２月にクリスマス新年号を年五回お送りしています。

2．スカラシップ支援（大学生と高校生）・・・年額６００００円（月額５０００円）

振り込み用紙の通信欄に「スカラシップ」と書いて一部振り込んできただけれは、支援学生を紹介。機関誌に同封して、本人からのお礼の手紙（英語）、６月に成績表、８月に写真、１２月に絵手紙が届きます。文通も可能。訪問の際は、自宅にご案内します。支援停止は、いつでも可能です。
支援は、授業料の他に、学用品代、米代、下宿代、各種プロジェクト代、お小遣いに使われます。
大学生は、年額６万では無理ですが、高校のスカラシップや自由寄付で通えるようにしています。

3．里子支援（小学生）・・・年額３００００円（月額２５００円）

振り込み用紙に「里子」と書いて、一部振り込んでください。８月に写真。本人からは、１２月に本人が描いた絵手紙をお届けします。支援停止は、いつでも可能です。
２ヶ月に一回、僻地の学校を訪問しては、学用品を支給し、プロジェクト代や場所によっては、お弁当用の米を支給しています。訪問の際は、村の自宅にご案内しています。

4．保育所・下宿小屋建設・・・３０万円（分割も可能）

振り込み用紙に「保育所」と書いて振り込んでいただければ幸いです。戦闘や政情不安定などの影響で、翌年にずれ込むこともありますが、建設結果はウエッブサイトで報告すると同時に、毎年１０月の機関誌とともに、その年の保育所の状況写真をお届けしています。

5．植林環境支援・・・６万円（コムの木６００本、１ヘクタール、現地の作業代）

洪水対策と先住民族が土地を手放さないようにするための、生活自立支援です。参加も可能です。

6．古着などの物資支援・・・ウエッブサイトを参照。手渡し参加も可能です。

ウエッブサイトに、活動報告と詳しい支援方法が書かれています。サイトからメールも可能です。

「検索：ミンダナオ子ども図書館」

http://home.att.ne.jp/grape/MindanaoCL/mindanews.htm

郵便振替口座番号　00100 0 18057：加入者名『ミンダナオ子ども図書館』

インターネットバンキング　＊銀行名　ゆうちょ銀行　＊金融機関コード　9900
＊店番　019　＊預金種目　当座　＊店名　〇一九店（ゼロイチキユウ店）　＊口座番号　001857

ミンダナオ子ども図書館は、フィリピン現地法人 NGO です。
問い合わせは、メールが最適 mindanao@zap.att.ne.jp
電話は、080-4423-2998（松居友：日本および現地転送携帯です）
現地携帯 09219603640 フィリピン国内ではこの番号に
日本事務局：Fax 専用　093-473-7710
現地住所：Mindanao Children's Library Foudation, Inc.
Brgy. Manongol Kidapawan City N. Cotabato 9400 Philippines
http://home.att.ne.jp/grape/MindanaoCL/mindanews.htm